

# 市田 とよ (いちた・とよ)

## 1、プロフィール

歌人。「黎明」に、大正 10 年から昭和 2 年まで 300 首余りの歌を発表した。その後、津軽照子(故津軽英麿妻)を頼って上京。旧津軽藩邸で、側女(お話相手)として仕えた。

### <生没>

1895(明治 28)年 8 月 29 日 ~ 1980(昭和 55)年 4 月 19 日

### <代表作>

1961(昭和 36)年に、秋田雨雀、蘭繁之らによって、歌集『樹氷』が発行された。72 首の歌が詠まれている。

### <青森との関わり>

西津軽郡木造村(現つがる市)出身。大正期、村内の文芸の集いである土曜会で竹内俊吉らと戯曲に親しむ。

## 2、作家解説

明治 28 年 8 月 29 日、西津軽郡木造村有楽(うらく)町市田呉服店の第五子として出生(父兵吉、地元の銀行経営にも参画。母りせ。)。20 歳の時、近所の葛西孝吉(葛西呉服店)と婚姻したが、23 歳で離縁、生家に戻った。この頃から文芸に興味を抱き、中央の詩誌「牧神」(近衛直麿、三木露風)に、詩を投稿する。近くの白樺文学者、葛西新八郎を訪ねるようになり、新八郎の脚本「夜明け」の友達 A 子のモデルとなる。その後、総合文芸誌的な性質を帯びていた「黎明」に、大正 10 年から昭和 2 年まで 300 首余りの歌を発表した。「出でがてに一言二言いさかいし父を思ひて畑打つ吾は」(「春の陽ざし」、大正 10 年)、「ひそやかに飛び来ては啼く小鳥ありわが病み伏せる窓のかなしさ」(「春の陽ざし」、大正 10 年)、「停車

場のうすぐらき灯にそむきゐて汽車を待つわれに秋風の吹く」(「地平の涯」、大正12年)、「ふるさとを遠くのかれて来しわれに雪さんさんと降りかゝるなり」(「黎明詠草」、昭和2年)等。

昭和2年、故郷を捨て、津軽照子(故津軽英麿妻)を頼って上京。旧津軽藩邸で、照子の側女(お話相手)として仕えた。その後、照子は千葉県東海村に疎開し、とよは都内で毛糸の編み物をしながら、下宿屋を営む。秋田雨雀、淡谷悠蔵らの訪問を受ける。

昭和33年、五所川原で戦前とよと親交のあった加藤東籬を偲ぶ会が開かれたが、この頃、東籬研究者である加賀谷健三が上京、とよと面談する。また、詩人 一戸謙三との文通が始まる。同36年には、雨雀、蘭繁之らによって、歌集『樹氷』が発行された。72首の歌が詠まれている。「三十五年ふるさとはなれてうすれたる記憶のひとつ夢によみがへる」、「追憶のはこをひらけば憎しみもかなしみも今はただに恋ほしく」、「毛糸(いと)たぐりたぐりつ胸にうかびくる今は遠き遠き夢のかずかず」、「こしかたのゆめ追ひぬそのはかなさを今日もまた明日も継ぎて生きなむ」等。

昭和55年4月19日、板橋区養育院で逝去、享年86歳。